

## 天上大風

国上山の五合庵で修行していた良寛が、ある年の端午の節句に、春風にさそわれて山を下り、燕の詩友神保柳波を訪ねようと、仲町あたりを歩いていた。中ノ口川の堤防では、子供たちがさまざまな凧を揚げて楽しんでいた。

その時、裏長屋から出て来たおじいさんが、「良寛さま、孫の凧に張ってやるのですが何か字を書いて下さい」といって一枚の白紙を差し出した。子供好きの良寛は二つ返事で、「天上大風」と書いてやった。

おじいさんは喜んで家に持ち帰り、茶の間の壁に張って眺めていると、ある日家主の高田屋が来て、「見事な書だ。譲ってくれないか」と頼んだ。

おじいさんは、「孫の凧に張ってやるんですから」と断われと、大家は、「立派な絵凧を買えるだけのお金をあげるから、譲ってくれ」といって金を置き、持って行った。

この書は良寛の傑作といわれ、長く高田屋（東樹家）に保管された。